

在日コリアンにおける言語アイデンティティと 言語生活の諸相

朴 浩 烈

1. はじめに

法務省の資料によると2012年12月末時点での在日外国人の総数は2,038,159人であるが、国籍別でみると在日コリアン（韓国・朝鮮）は中国の次に多くなっている。韓国・朝鮮国籍者の総数は530,046人であり、そのうち特別永住者は377,350人となっているが、大雑把にいてこの特別永住者が在日コリアン・オールドカマーといえる⁽¹⁾。在日コリアン・オールドカマーの約95%は今日の韓国の地出身者であり、その多くは慶尚道、全羅道、済州道をルーツ（本籍）としているといわれている。

本稿は在日コリアン・オールドカマーが研究対象であり、その中でも「朝鮮学校周辺コミュニティ」を調査対象としている⁽²⁾。朝鮮学校周辺コミュニティとは、①朝鮮学校卒業もしくは通った経験のある人たち、②親兄弟・子ども・親族などが通った経験を持ち（現在含む）ながらも、その人たちとの交流がある人たち、③バザーをはじめ学校や父母会などを主催者とするさまざまな行事に集う人々や、その人たちとの交流（付きあい）がある人たちで構成されたコミュニティを指す。在日コリアンが主であるが、在日と結婚した外国人（日本人含む）、近年韓国から来日したニューカマー、中国朝鮮族なども含んだ緩やかなコミュニティである。したがって配偶者や子どもの国籍も韓国、「朝鮮」、日本、そして数はすくないもののその他など様々である。本稿は、この人たちを被調査者として言語とアイデンティティ、言語使用と言語生活など言語にまつわる様々な様相を共時的観点から明らかにし言語化したものである。

マイノリティにおける言語生活の実態や言語意識、それらに付随すると考えられる深層心理などは容易く可視化されるものではない。そのような観点からアンケート調査を実施しその結果を踏まえ分析するという研究方法を採用している。

アンケートの質問内容は、被調査者コミュニティ（朝鮮大学校、朝鮮学校教員、

朝鮮学校周辺コミュニティに絞った一般成人)においてはじめて実施された内容であろう。また朝鮮大学校、朝鮮学校教員、朝鮮学校周辺コミュニティに絞った一般成人を被調査者層とした初調査となる。

2. 学術調査の概要

調査は2006年11月から2008年12月まで行った。アンケートの調査対象者を表にすると以下ようになる。

表1：被調査者の内訳

中学・高校生	140 (中 16, 高 124)
大学(院)生	348
教員	91
一般成人	225

なお中・高校生とその他ではアンケート質問が若干違うのもあるので、中学・高校生の統計がないグラフがあることをことわっておく。すべての被調査者が2, 3, 4世である。全員が日本で生まれ育った人たちであり第1言語は日本語である。

3. 言語認識から見えてくる言語アイデンティティの様相

被調査者たちは、自分たちと南北朝鮮(韓国と朝鮮民主主義人民共和国)のことは、つまり各々の国家語との関係についてどのように考えているのか、そしてコミュニティにおいて使用されている在日による朝鮮語についてどのように評価しているのかをアンケート調査を踏まえ考察する。ここではアンケート質問「在日には(北, 南, 両方)のことは必要である, とその理由」, そして「在日同胞式の朝鮮語といわれることは(だめである, 直さなければならない, 問題ない)と, その理由」の2つを取り上げる。このようなアンケート質問は、被調査者コミュニティにおいてはじめて実施された質問であろう。

被調査者たちは日本において朝鮮語を学び、使って生活しているので、日本語と

の言語接触や言語干渉，言語借用とコード切り替えなどにより，朝鮮半島における朝鮮語とは若干の差異がある朝鮮語を使用している．したがってアンケートにおいては被調査者たちが使っている朝鮮語を「在日同胞式の朝鮮語」とした．

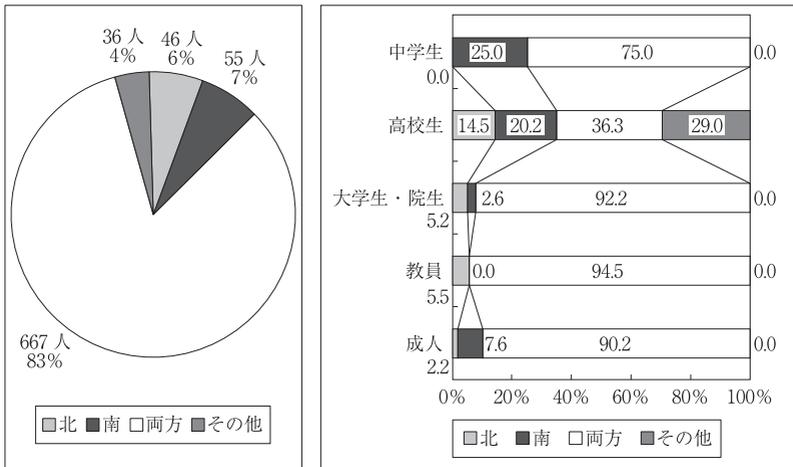
3・1 国家語と民族語，そしてコミュニティ言語に対する考え方

朝鮮半島が南北に分断している現状から，韓国では「韓国語」，朝鮮民主主義人民共和国（これ以降は「北朝鮮」と表記する）では「朝鮮語」との呼称が使われている．したがって「韓国語」や「朝鮮語」は国家語として扱われる場合がある．しかし「コリア語」（ここでは韓国語と朝鮮語を含めた呼称とする）は朝鮮民族における民族語である．

「在日には（北，南，両方）のことばが必要である，とその理由」の結果から分析を行う（「北」は北朝鮮，「南」は韓国を指す）．アンケートは，かっこ「（ ）」からの選択と記述欄を設けて自由に書いてもらった．

まずは，アンケート用紙に書かれた「理由」の中から回答別にいくつかをピックアップして紹介する．

グラフ 1-1 (左)，1-2 (右)：「在日には（北，南，両方）のことばが必要である」の結果データ(3)



回答「北」

「北側に行く機会が多いから」高校生・男性

「純粋な朝鮮語であるから」高校生・男性

「南の語学資料などは日本にたくさん入ってくるが、北の資料は少ないため」高校生・男性

「共和国における民族自主の理念がことばにも生かされている」大学生・男性

「最近の南のことばは外来語が多い」教員・男性

「共和国のことばが、純粋で伝統的な民族語としての姿を残していると思う」教員・男性

「南のことばは聞く機会が多いが北は少ない、必要であるというよりも勉強しなければならぬのは北のことば」成人・男性

回答「南」

「南にたくさん行くと思うから」高校生・男性

「故郷が韓国だから」高校生・男性

「国際的に韓国語を使ったほうが有利だから」高校生・男性

「親戚が韓国人だから」高校生・女性

「韓国旅行するから」高校生・女性

「日本では南のことばの需要が高い」大学生・男性

回答「両方・その他」

「統一した時を考えると両方」高校生・女性

「北も南も同じ民族のことばだから」高校生・女性

「北の人とも南の人とも、会って会話できるようになりたい」高校生・女性

「我々のことばは在日ことばとして定着してきている」高校生・女性

「両方自分の国であるため」大学生・男性

「表記、イントネーション、単語使用などで違いはあるが朝鮮語は朝鮮語」大学生・女性

「分断の歳月が長く、南北のことばの差異が少しずつ表れてきているため」大学生・女性

「円滑な意思疎通のため、南北の言語規範を統一したらと思う」大学生・女性
「片方に偏る必要はない、両方知って適切に」教員・男性
「一方を除外し問題に向き合うということは、在日朝鮮人の立場から考えると良心的にも政治的にも適切ではない」成人・男性
「何時何処でもウリマル（我々のことば＝民族語としての朝鮮語を指す）が通じるようになるためには両方の習得が必要」成人・女性

内容が重なるものはできるだけひとつの回答に収斂させた。したがって高校生の「理由」として、または大学生の「理由」として紹介したが、教員や成人の回答にも同じような「理由」が書かれたものもある。「理由」として書かれた中で一番多かった内容としては、朝鮮半島統一を見据えながらの「理由」であった。朝鮮半島の南北分断を克服し、統一コリアを熱望する朝鮮学校周辺コミュニティの特徴が「理由」に明確に現れたといえる。

グラフ 1-1 は、南北両方のことばが必要であるとの回答（83%）が、他を圧倒した結果となった。「理由」から結果要因を筆者なりに分析しまとめると以下のようになる。

- ①朝鮮学校にて学び習得した朝鮮語の規範は北朝鮮の文法規範でありながらも朝鮮学校周辺コミュニティの人々は、今の韓国の地出身者が多いので祖父母、父母からの継承語の必要性を否定していない。
- ②日本において必要（翻訳・通訳、ビジネス、各種試験など）とされるのは韓国語である。
- ③在日として南北のことばを理解し表現できるのは有利である。

このように分析したからといって、自分たちが習得した北朝鮮文法規範による朝鮮語を決して否定しているのではない。その根拠としてたとえばグラフ 1-2 の高校生には「その他」を設けている。この「その他」はアンケートの回答欄には設けていない。高校生のアンケートは筆者が直接教室に入って実施したが、回答をまとめ分析する過程において「その他」を設ける必要性を感じ恣意的に設けたものである。高校生の 29% がわざわざ文を記述したが「南であろうが北であろうが、どちらかのことば一つを知っていればいい」という記述に集約される。つまり北のこと

ばだ、南のことばだとあえて分ける必要があるのか、一つを知れば十分通じ合えるのではないのかということである。

注目されるのは、北（46人、6%）よりも南（55人、7%）の回答が若干ではあるが上回っていることである。これは朝鮮学校にて「国語」として学んだ朝鮮語を国家主義的な「思想」として意識している人がほとんどいないと分析するべきであろう。換言するならば、朝鮮学校周辺コミュニティにおいては、規範としての「国語」による政治意識・帰属意識・言語ナショナリズムを垣間見ることは出来ないのではないかと筆者は捉えている。

グラフ1-2であるが、中学生の回答では「北」の回答が0%なのに対し「南」は25%となっていることが注目されよう。高校生の場合「北」（14.5%）の回答が増えてはいるが「南」（20.2%）よりも若干少ない。しかし大学生・院生は「北」（5.2%）が「南」（2.6%）を若干ではあるが上回っている。朝鮮大学校の歴史、研究及び教育方針などが影響しているのであろう（朝鮮大学校のホームページを参照されたい）。

学校教員は「南」が0%であるが、北の言語規範により学校教育が成立している現実、そして朝鮮学校が歩んできた歴史を重視している結果であると考えられる。

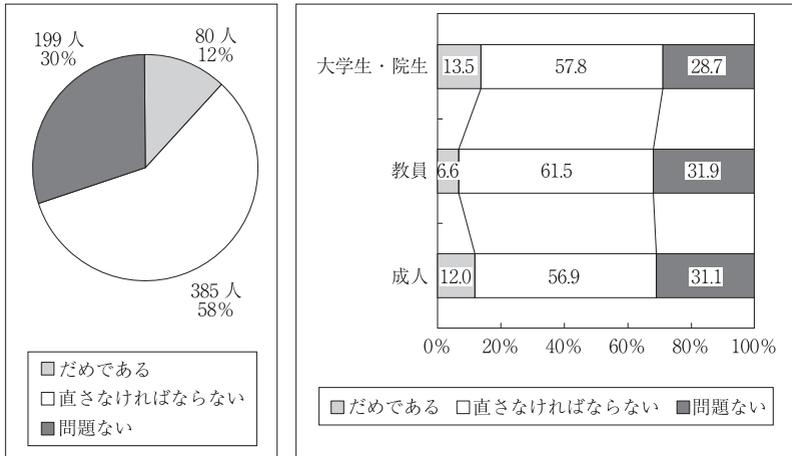
成人は「北」（2.2%）より「南」（7.6%）という回答が多かった。調査結果から朝鮮学校周辺コミュニティに集う人々の思想信条は多様であり、ひとつの考えや志向だけに集うコミュニティではないということを実証したといえなくもない。ここで「ステレオタイプ」について再考しなければならないという視点も浮上してくる。それは、任意の集団を一括りにし、固定的観念にて捉えようとする傾向である。個々の存在と価値観の多様性という視点を国民だけでなく、マイノリティに対しても配慮すべきではないかという視点である。

この質問にて南北朝鮮との関係におけることばの志向を見たことになるが、それでは被調査者たちは自分たちのことば（在日朝鮮語）についてどのように考えているのかを次の質問にて考察する。

3・2 コミュニティ言語に対する評価

ここではアンケート質問「在日同胞式の朝鮮語といわれることばは（だめである、直さなければならない、問題ない）と、その理由」を分析する。

グラフ 2-1, 2-2: 「在日同胞式の朝鮮語といわれることばは (だめである, 直さなければならない, 問題ない)」の結果データ



在日コリアンのことばについては「中途半端」や「混ざった」という意味が込められた「チャンボンマル」, 「ウリボンマル」, 「ピビンマル」, 「イルボンマル式ウリマル (日本語式朝鮮語という意味)」などと在日外部からだけではなく内部からも指摘された経緯がある。しかし、このようなものさしだけをもって在日のことばを論ずることには問題があるのではないかとの考えから筆者は、雑誌『イオ』に「韓流ドラマと民族教育, そして在日朝鮮語」(2005年10月号)と「恥ずべき「ウリボンマル」なのか, ネイティブ至上主義の犠牲者か, 「在日朝鮮語」をどう捉えるか」(2006年3月号)を寄稿した。

これら2つの文が朝鮮学校における教育関係者だけでなく、在日の大衆をも巻き込んで大きな反響を呼んだようである。在日の識者から「新たな論点を提供したことにより、いろんな意見を噴出させたということで、在日のことばを考える上で転換点を与えた」との評価をいただいた。そのような経緯から今回のアンケート調査の中でも筆者自身が最も注目した質問のひとつである。

アンケート質問「在日同胞式の朝鮮語といわれることばは (だめである, 直さなければならない, 問題ない) と、その理由」は、朝鮮学校周辺コミュニティにおける「在日朝鮮語」に対する共時態 (現在時における状態) としての評価にもなろう。つまり自分たちのことば (朝鮮語) についてどのように考えているのかを考察でき

るということである。そしてさまざまな考察の結果、どのような言語アイデンティティが作られている（作られつつある）のかも分析できる質問である。

まずグラフから「直さなければならない」と「だめである」を分析してみる。

今回の調査によると「直さなければならない」(58%)が回答の半数を超えた。「直さなければならない」よりも「だめである」(12%)のほうがより否定的な回答であるが、両方の回答に書かれた「理由」を読んでもはっきりした違いは見受けられなかった。したがって「直さなければならない」と「だめである」の「理由」はひとまとめにして考察を行う。

回答に書かれた「理由」の代表例であると考えられる見解を列挙してみる。列挙に際しては「理由」として書かれた内容ごとに、共通性が認められるかどうかを分析してみた。その分析をもとにして筆者が便宜上、A群は在日のことば自体を考えての回答、B群は本国と在日との関係を考えての回答、C群は同化否定と民族的アイデンティティを考えての回答、D群はことばと民族との関係を考えての回答に分けてみた。

A群＝在日のことば自体を考えての回答

- ①不正確なことばが多いため
- ②もう少し正しい朝鮮語を使うべき
- ③間違いことばは教育を通して直さなければならない
- ④完全に間違ったことばはアウト、修正必要
- ⑤我々だけではなく、南も北も直さなければならないことばはある
- ⑥(在日の朝鮮語は)方言とは言えないから

B群＝本国と在日との関係を考えての回答

- ①自分たちだけで通じる朝鮮語ではだめである
- ②祖国(北朝鮮)の人たちと何の遜色もなく十分なコミュニケーションをとるため
- ③故郷(韓国)に行った時、十分通じなければ恥ずかしい
- ④民族の統一を見据えながら考えると今の状態でよいとはいえない

C群 = 同化否定と民族的アイデンティティを考えたの回答

- ①ことばが日本語化すれば感覚も日本化する
- ②日本で住んでも朝鮮民族の一員として存在し続ける意思があるなら朝鮮語は重要

D群 = ことばと民族との関係を考えたの回答

- ①ことばはすなわち民族であるため
- ②ことばは民族を特徴付ける共通性の一つ

「理由」を見ると在日という立場を踏まえながらも、自分たちの存在を民族との関係において考えようとする傾向が濃厚であると分析できる。つまり出自（ルーツ）と民族性を重んじ、ことばと自分との関係を断ち切るのではなく関係性を強く求めようとする傾向が強い人たちが「直さなければならない」、「だめである」の回答者たちではないかと分析できよう。朝鮮半島との一体感、自己同一性を求めようとする民族的アイデンティティが表出していると考えられる。その表徴としてことば（朝鮮語）を重視していると分析できる。ことばを「社会的境界」として考えようとする強い意識のもと、同化ではなく出自民族の一員として生きてゆこうという姿勢みたいなものが、ことばと関連するA群、B群、C群、D群の「理由」になっていると考えられる。

一方「理由」からは「不正確」、「正しい朝鮮語」、「恥ずかしい」ということばも見られる。このような個人的あるいは集団的な意識からどのような構造を読み取れるであろうか。イ・ヨンスク（2009）は、少数言語の多くの場合、暗黙の政治的・社会的・文化的圧力がはたらき否定的価値付け等々の問題に直面しているという。その結果、自己の言語や文化に対して自己卑下（恥）ともいうべき態度が生まれるが、社会的ステレオタイプの打破と社会的関係の平等を目指さなければならないという。

この見解を日本と在日、そして朝鮮半島と在日へと置き換えて考えてみるならば、本流（本物）と支流（偽者）という図式が浮かび上がる。「故郷（韓国）に行った時、十分通じなければ恥ずかしい」、「もう少し正しい朝鮮語を使うべき」という被調査者の「理由」に、在日のことばに対する何らかの否定的態度はないのだろうか、

あるとするならばこのような態度を産出させた要因は何であろうか。

在日同胞式の朝鮮語といわれることは「直さなければならない」(58%)、「だめである」(12%)という回答には、民族的アイデンティティによる自我意識と中途半端な自画像(内外からの評価)を回避しようとする意識が複雑に重なりあっていると考察できる。この「中途半端」な自画像には自己肯定ではないコンプレックス、社会的ステレオタイプによる自己卑下も潜んでいるとも分析できよう。

つぎに「問題ない」と答えた人が30%になるということであるが、何で問題がないのかを被調査者たちがアンケート用紙に書いた「その理由」の中からいくつか紹介してみる。

大学生・院生

男性

「我々は朝鮮人でもあるが、在日朝鮮人である」

「いわゆる「在日同胞式朝鮮語」は生活の中で生まれ育まれたことばであるため」

「(在日の朝鮮語は)サトゥリ(方言)のようなもの」

「100%ネイティブ(スピーカーになること)は不可能だと考えます」

「問題はなきにしもあらずだが、ひとつのウリマル(朝鮮語)だと思われます」

「ことばは使用される風土により変化するのは致し方ないので、否定する必要はない」

「民族性が喪失されない限り問題ない」

「(在日の朝鮮語は)ことばとして定着しているので直すのは難しい」

女性

「間違いことばであれば直さなければならないが、一種の方言として認識すればよい」

「我々のことばも一つの文化であると考えるのであれば、良くもなく悪くもない」

「日本で使われているので問題ない」

「そこ(在日の朝鮮語)に在日朝鮮人のアイデンティティが宿っているから」

「同胞社会を感じることができる文化的価値があるので」

教員

- 30代男性「ことばによる偏見と差別には反対」
- 20代女性「帰国するのでもなく一生、在日同胞社会で生きてゆくので在日同胞史ウリマルは致し方ないし我々のことばを発展させることも一考に値する」
- 20代女性「ことばはきちんと学ばなければならないが、意思疎通ができればよいし、規則に縛られなくてもよいのでは」

一般成人

- 30代男性「在日の朝鮮語は一種の「クレオール言語」と見てもよいのでは」
- 30代男性「劣等感、異質感を抱くこと自体がおかしい」
- 40代男性「意思疎通できれば問題ない」
- 50代男性「在日同胞の歴史が染み込んでいることばだと考えるから」
- 60代男性「在日同胞の文化であるので」

21世紀に入り南北融和、韓国旅行の日常化と韓国映像文化の視聴、ニューカムーとの日常的な接点増加、そしてグローバル化による変化などが在日の意識に変化をもたらしたと考えられる。朝鮮半島との関係が相対的に身近に感じられるようになったことが、朝鮮半島と在日の距離感を逆に遠くさせたという現象を引き起こしたという側面も考えられる。

最近、書きことばについても在日自身から新たな見解が発せられている。たとえば、年1回行われている朝鮮学校の生徒たちの作文コンクール（正式名称は「コッソソニ懸賞募集」）の詩部門審査委員（2008年度）をつとめた金敬淑は、雑誌『イオ』（2009年2月号）にエッセイを寄稿しているが、その中に「朝鮮語と日本語、二つの言葉で何かを思い、南北朝鮮・在日同胞の色とりどりの言葉のシャワーをあびながら一語一語ウリクル（朝鮮の文字）でこしらえた、そう、まるでボジャギのような詩。素敵だ……日本で生きる私たちの言葉——ウリマルがボジャギのように温かい言葉として受け継がれるように」とある。在日の言語環境とことばの実態をありのままに見つめながら、話しことばだけでなく書きことばをも考えようとする新たな傾向が現れは始めている。これも朝鮮学校周辺コミュニティにおける新たな特徴でもあろう。このような新たな特徴と「問題ない」の回答に寄せた「理

由」は、朝鮮学校周辺コミュニティの変化を物語っている。

基本的に朝鮮語を重視する姿勢には変わらないが、在日生活年数の蓄積と世代交代により、南北朝鮮との関係（ことば）における「正々堂々とした朝鮮人」からオリジナリティに満ちた「在日コリアン」を志向するようになってきた人々が増えてきているということではないだろうか。

人間は社会的な存在であり社会との位置関係において自己規定する傾向がある。在日に置き換えるならばここでの社会とは、在日と南北朝鮮、在日と日本との関係、日本と朝鮮半島との関係において作り出される社会である。この社会は実態を伴う社会でもあるし、観念（主観的に思い描く形象や意識）が織り成す社会でもある。自己規定には肯定的側面と否定的側面がありえる。また居住または出自国家・民族との関係における自己規定、マジョリティのとの関係における自己規定などもありえる。在日の自己同定は、このような複雑極まりない狭間で揺れ動いていると考えられる。

ここでは、ことばを通して国家・民族・コミュニティに関する認識を取り上げ、言語問題に現れているアイデンティティなどを扱ったが、グローバル化の中、ディアスポラや多様な移民などにおいても、出自国家や民族のことばと居住国における自分たちのことばをどのように考えているのかなどは興味深い研究テーマである。ことばの評価による人間評価、それによる優劣のステレオタイプ化、自己尊厳と偏狭なナショナリズムの混同だけは避けねばならないが、ことばと人間の探究によって、新たな事実が明るみに出ることは研究の醍醐味でもある。

4. 言語生活の諸相

在日コリアンの言語と生活を扱った先行研究としては、任榮哲（1993）、生越直樹（2005）、熊谷泰明（1983）、洪祥進・中島智子（1980）、藤井幸之（1999）などがある。ここでは先行研究の知見を踏まえ比較分析を行いながら、アンケート調査の結果から言語生活考究を行う。

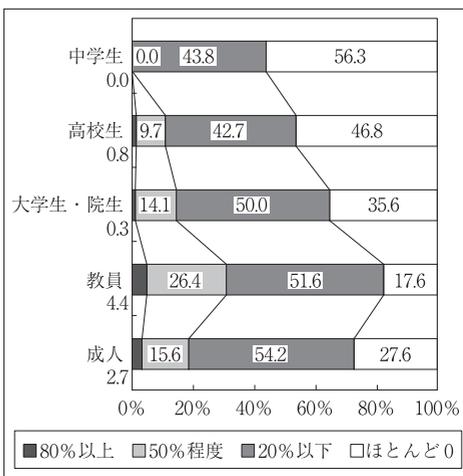
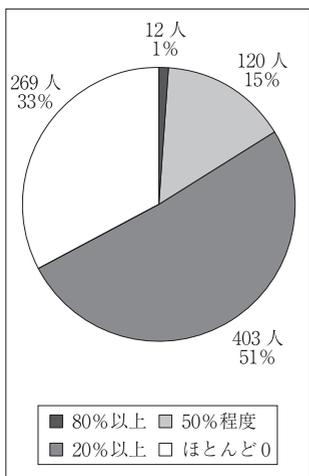
アンケートの質問は「家（家庭）での朝鮮語使用は（80%以上、50%程度、20%以下、ほとんど0）と、その理由」、「朝鮮語を使う場面・場所は」（中学・高校生対象のアンケートは「学校以外で朝鮮語を使う場面・場所は」とした）、「親戚は

朝鮮語を知っている人が(多い, 少ない)」、「父母は朝鮮語を(わかる, わからない)」の4つを扱って分析を行う。宮脇弘幸(1993)は、在日朝鮮学校子女が家庭で使う言語調査を実施しているが、本稿では、朝鮮大学校の学生、教員、一般成人を取り上げ、なぜそのような言語生活になるのかを「理由」から明らかにしようと試みた。

4・1 朝鮮語の使用率

被調査者たちは普段、どのような言語生活を送っているのかを明らかにするため、家(家庭)での朝鮮語使用率を調査した。これにより日本語の使用率もうかがえる。グラフ3-1を通して、「20%以下」→「ほとんど0」→「50%程度」→「80%以上」という順に%が少なくなっていることがわかる。約半数(51%)が20%以下という結果と「ほとんど0」をプラスすると84%になる。これにより朝鮮学校周辺コミュニティにおける家庭での言語使用は、日本語が占めている割合が高いとなる。一方、数は少ないものの12人が80%以上、120人が50%程度家庭内において朝鮮語を使用しているという実態も明らかになったが、ことばの使用には個人差(各家庭における差)が大きく左右するということをグラフ3-2が明示している。

グラフ3-1、3-2:「家(家庭)での朝鮮語使用は(80%以上、50%程度、20%以下、ほとんど0)」の結果データ



ここでいくつかのアンケートの中から「その理由」をピックアップし、分析を深めてみる。「その理由」は空欄を設けて自由に書き記すようにしたが、すべてのアンケート協力者が文章を書いたわけではない。

大学生・院生

男性

- 「家ではほとんど朝鮮語を使わない」(0%⁽⁴⁾)
- 「父と祖母との会話は朝鮮語」(20%)
- 「固有の単語などは朝鮮語だが日本語が多い」(20%)
- 「父が朝鮮語を使うので自然と朝鮮語になる」(50%)
- 「幼い頃から朝鮮語会話が基本」(80%)

女性

- 「日本語のほうが楽(たやすいの意味)だから」(0%)
- 「100%日本語でも朝鮮語でもない」(20%)
- 「父母が教員なので会話の中に朝鮮語が混じる」(20%)
- 「兄弟どうしはほとんど日本語」(20%)
- 「親に謝るときは朝鮮語、ほかはだいたい日本語」(20%)

教員

男性

- 「日本語が第一言語であるため日本語会話になる」(0%)
- 「朝鮮語を使う必要性をあまり感じない」(0%)
- 「日本語が使いやすい」(20%)
- 「家族全員、朝鮮語を話せるので80%以上になる」(80%)
- 「学校教員であるため息子・娘との会話は朝鮮語である」(80%)

女性

- 「家族全員朝鮮語を理解できるが、あいさつ、単語以外は日本語が多い」(20%)
- 「幼い頃から朝鮮語が混じるが、家族会話は日本語がほとんどである。朝鮮語を話せるが何となくでれくさいような感じがして使わない」(20%)
- 「出来るだけ朝鮮語で話そうとする雰囲気があるが、自然と20%くらいになる」

(20%)

一般成人

男性

- 「日本語が習慣になっている」(0%)
- 「生活様式と生活文化がほとんど日本化しているため」(0%)
- 「ことばの完全同化だけは避けたい」(20%)
- 「同胞（在日）社会における感情表現には朝鮮語が最適であるため」(50%)
- 「民族性を守るため朝鮮語会話を重視している」(80%)

女性

- 「自然と口からでることばが日本語」(0%)
- 「日本語のほうが理解しやすいし、させやすいため」(0%)
- 「夫と話すときはなぜか朝鮮語」(20%)
- 「せっかく朝鮮語を学んだし子どもたちにも学ばせているのに、すべて日本語だとなんとなく悲しくなるため」(20%)
- 「シアボジとは朝鮮語、シオモ二とは日本語が多い」⁽⁵⁾(20%)
- 「自然と会話に朝鮮語と日本語が行ったり来たりする」(50%)

生越直樹（2005）、朴良順（2006）も指摘しているが、本稿における被調査者層においても以下の3つを見出すことが出来る。

第1に、ことば使用と言語意識には、密接な関係があることを伺い知ることが出来る。そのことは自己ルーツおよび朝鮮語に対する肯定的な考え方、民族的アイデンティティを守ろうとする意識などの反映とも考えられる。

第2に、ことば使用におけるコード切り替え、及びことばの借用が日常的に行われている。

第3に、家庭内における使用言語は日本語使用が多いが日本語モノリンガル化までは至っていない。

本稿の特徴としては、被調査者たちがなぜ朝鮮語もしくは日本語を家庭内において使用しているのかを、回答者の朝鮮語使用率を同時に明示しながら「理由」を明らかにした点である。そして朝鮮学校周辺コミュニティの中でも朝鮮語使用率に

は個人差が大いにあるという事実が確認できたことである。

ここで、この質問と関係がある3つの先行研究の調査結果を見てみることにする。今回の成人被調査者の中には、子どもを日本の学校に通わせている人も存在したが、洪祥進・中島智子（1980）では「家庭の会話で使うことば（%）」をまとめている。それによれば「朝鮮語が多い」0.4%、「半々である」5.3%、「日本語が多い」92.6%となっている。宮脇弘幸（1993）の場合、「朝鮮語がほとんど」1.9%、「日本語がほとんど」68.0%、「半々」29.3%となっている。

生越直樹（2005）は、建国中学・高校生（84人）を対象に家庭内使用言語状況に関するアンケート調査を行った結果をまとめている。調査は①「韓国語だけ」、②「韓国語多い」、③「日本語多い」、④「日本語だけ」の中からの選択である。結果は④の「日本語だけ」が65%、③の日本語多いが35%で、①と②は0%となっている。生越は親、子どもの出生地（韓国か日本）別に調査を行っているが、その結果「親子とも日本生まれの家庭では、日本語中心の度合いが高くなっている」と分析している。生越の調査は、筆者が実施したアンケートとは質問内容と選択肢が異なるため単純に比較は出来ないが、建国学校、朝鮮学校ともに家庭内では日本語使用の割合が高いといえる。

いくつかの先行研究と本稿で明らかになったことは、在日コリアン・オールドカマーにおいては生活言語としては日本語使用が多いという結果であるが、要因としては日本語が第1言語であること、つまり最も使用しやすく相互理解におけるコミュニケーション手段として日本語が優勢（第1言語）であるからではないかと推測される。

4・2 朝鮮語の使用場面・場所

まずは、中学生（全員）16人と高校生124人（高校1年：26人、高校3年：98人）を対象とした質問「学校以外で朝鮮語を使う場面・場所は」の結果について見ることにする。合計140人の回答となる。すべての学生が質問に答えてくれたわけではないが、約70%がアンケート用紙に記入してくれた。調査対象と質問内容においてはじめての調査である。

朝鮮学校では校内（授業、クラブ活動など）においては、教師も学生も基本的に朝鮮語を使用しているので質問は「学校以外で朝鮮語を使う場面・場所は」となる。

この質問により学校、家庭、その他での朝鮮語使用の全体像が明かされることになろう。なお、表現上の違いは若干あるものの、中学生と高校生のすべての回答は、以下の内容に集約される。

中学生の回答 (8)

- ・ 親戚と会った時
- ・ 目上の人と話す時
- ・ 正月
- ・ 電話で話す時
- ・ 祖父母の家
- ・ あいさつ
- ・ 結婚式の時
- ・ 公式的な場

高校生の回答 (16)

- ・ 親戚の家、親戚とのあいさつ
- ・ 祖父母との会話
- ・ 年上の人と話す時
- ・ 同胞（オールドカマー）と会った時
- ・ 友達の家で友達の両親との挨拶や会話
- ・ 先輩に会った時
- ・ 在日のさまざまな集いの場
- ・ 韓国に行った時
- ・ 朝鮮（北）で
- ・ 韓国人（ニューカマー）との会話
- ・ (自分の) 家
- ・ 通学路、登下校時、電車やバスの中
- ・ 友達と遊びに行った時
- ・ 聞かれたくない話をする時、内緒話
- ・ 同胞（韓国人や在日）が経営するお店に行った時

中学生の回答「電話で話すとき」は、どちらかといえば自分たちの内輪話ではなく、相手が朝鮮語能力を有している人や目上の人に対し、電話での「失礼」を回避し礼儀を重んじようとするためであろう。

生越直樹(2005)は、「韓国語そのものが一種敬意表現になっているのではなかろうか」との見解を示したが、朝鮮学校生徒の場合も「祖父母との会話」、「目上の

人と話すとき、「友達の家で友達の親との会話やあいさつ」、「先輩に会った時」の回答から敬意表現の一種になっているという側面もあると分析できる。また「結婚式のとき」、「公式的な場所」、「在日同胞たちの様々な集い」などにおいて朝鮮語を使うということは「公／私」という観点から考えると「公」という場面・場所となろう。しかし朝鮮語は「私」でも使われているし、日本語と朝鮮語が領域使用と機能分担において厳格な区別を設けているとは断定できない。そのためこれだけをもって日本語と朝鮮語を「上位・下位」言語として分類・分析することには問題があると認められる。

高校生の「通学路、登下校時、電車やバスの中」、「友達と遊びに行ったとき」、「聞かれたくない話をするとき、内緒話をするとき」の回答には「内輪話」という共通点があろう。恋愛の話やクラブ活動に対する不満もあるという。生活において朝鮮語と日本語をうまく使い分けていると考えられる。いずれにせよ、中学生も高校生もバイリンガル能力を有効活用しているといえるのではないだろうか。

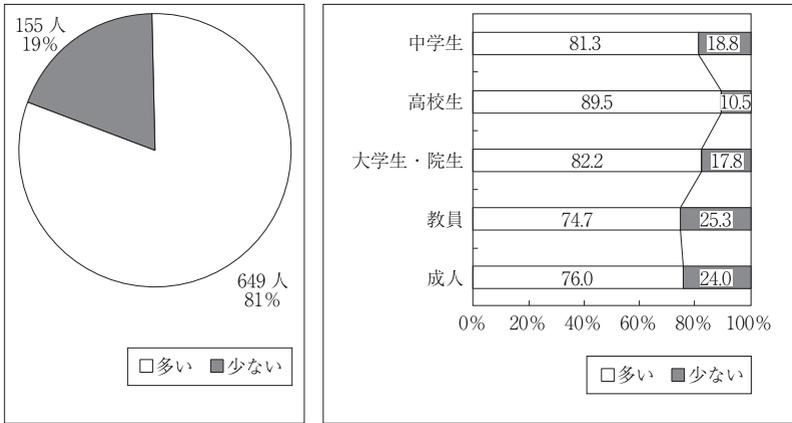
次に大学生・院生、教員、成人の結果であるが、質問は「朝鮮語を使う場面・場所は」であり、中学・高校生の質問から「学校以外で」を外したものである。大学生・院生は大学での「公」の場面・場所においては、基本的に使用言語は朝鮮語であり、学校教員は職場（学校）で日本語が必要である場合を除いて日常的に朝鮮語だけが使用されているということをおさえておきたい。

アンケートを見た結果、必要に応じて朝鮮語を使っていると分析できる。つまり「この場面で、この場所で」というように固定的な言語使用ではない。解答欄には、親戚や目上の人、公式的な場や同胞の集まり、韓国の友人や親戚、通訳や電話、先生や先輩、母校や後輩、父母や夫、職場や家などたくさん書かれていた。日常生活上におけるさまざまな場面・場所にて朝鮮語を使用していることが伺える。このことから現在の朝鮮学校周辺コミュニティにおいては、日本語とともに朝鮮語も生活言語としての機能を果たしていると考察されよう。

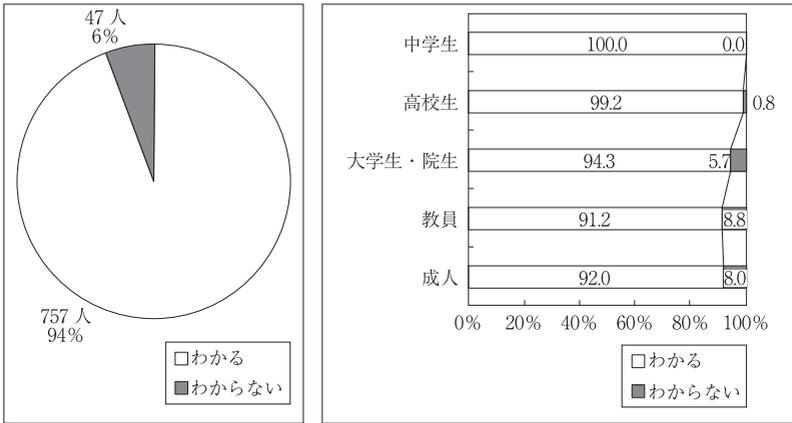
4・3 環境と言語生活

ここでは、言語生活との関係が不可分であると考えられる最も身近な環境に関する質問「親戚は朝鮮語を知っている人が（多い、少ない）」、「父母は朝鮮語を（わかる、わからない）」の回答を分析する（選択回答アンケート）。

グラフ 4-1, 4-2:「親戚は朝鮮語を知っている人が(多い, 少ない)」の結果データ



グラフ 5-1, 5-2:「父母は朝鮮語を(わかる, わからない)」の結果データ



一般的に自己を取り巻く人間関係を家族、親戚、友人、知人などと言い表す場合があるが、この質問はアンケート協力者の親戚は朝鮮語を知っている人が多いのか、少ないのかを調査することによって、被調査者周辺においてコミュニティ言語として朝鮮語が存在しているのかを判断する一資料を得られる質問である。また「父母」という最も身近な存在を対象とした質問も「親戚」調査と合わせて考察すると、言語コミュニティを形成している核心に関する調査であるといえよう。特に継承語

という観点からの分析を試みる場合、「父母（親）」を対象とした調査は、欠かすことの出来ない項目でもある。

在日コリアンの場合、コミュニティ言語としては日本語と朝鮮語、そして2つのことばがコード切り替えを引き起こしながらのことばである。もっとも身近な言語環境を調査することは言語生活を鳥瞰する上で欠かせない要素であろう。

最近では被調査者コミュニティにおいて、在日ではない韓国人と結婚するケースが多くなっている。そのような人たちが親戚であるならば、朝鮮語を知っているとなる。親戚の中には朝鮮語が第一言語である1世もいると考えられるが、その数が年々減少して行く中で81%の親戚が朝鮮語を知っているという結果を総合的に考えると、やはり朝鮮学校にて朝鮮語を学んだ人が多いのではなかろうか。いずれにせよ被調査者周辺コミュニティにおいて親族が朝鮮語を知っている%が高いという結果が出たことは、日本における朝鮮語コミュニティ（バイリンガルでもある）を形成しているとの分析も可能であろう。

一般的に世代交代が進み朝鮮語を知らない%は、若い年代になればなるほど高くなると考えられる。しかし「グラフ5」はその逆、つまり朝鮮語を成人（教員含む）よりも学生（中学～大学・院生）の父母のほうが知っている%が高くなっている。グローバル化の中で減少傾向にあるものの、継承語や民族性を重視する人たちによって学校が存続している結果ではないかと考えられる。

現在、朝鮮学校には次のようなケースにて生まれた子どもたちが通っている。

- A：在日どうしの間に生まれた子ども
- B：在日と日本人の間に生まれた子ども
- C：在日と韓国人の間に生まれた子ども
- D：韓国人と日本人の間に生まれた子ども
- E：中国朝鮮族と在日の間に生まれた子ども
- F：在日と様々な外国人との間に生まれた子ども

そして朝鮮学校に対する肯定的理解がある人、韓国・朝鮮のことばや文化などを子どもたちに身につけさせたいと考えている人、父親あるいは母親自身が朝鮮語能力を有する人たちを中心として子どもを朝鮮学校に通わせていると考えられる。

言語生活をどのことばによって営むかという言語行為には能力、環境、言語意識などが複雑に絡み合うが言語的マイノリティの場合、家族や親族など身近な存在のことば使用が言語生活を大きく左右すると考察できる。このことは日本における日系人や在日外国人の子どもに関するさまざまな調査研究（社会環境と多文化共生、言語能力と教育・学力調査）などからも明らかである⁽⁶⁾。

本稿「4」では、この分野における先行研究を補足するため、調査結果をグラフによって明示し分析することによって、在日の言語生活考究における最も重要かつ必要不可欠な断面を明らかにしたことになる。今後、中国朝鮮族をはじめとするさまざまな海外のコリアンとの比較によって、在日における言語生活上の特徴もより一層鮮明になろう。

言語生活は「時間・空間」によって多様な変化を伴うものであるため、複眼的視野からの研究によって共時的に明らかにされるべきであり、その蓄積によって通時の変遷と事象を抽出するべきであろう。このような視点に立つ時、新たな研究方法論も生み出されてしかるべきと考える。

5. 朝鮮語能力（自己評価）意識

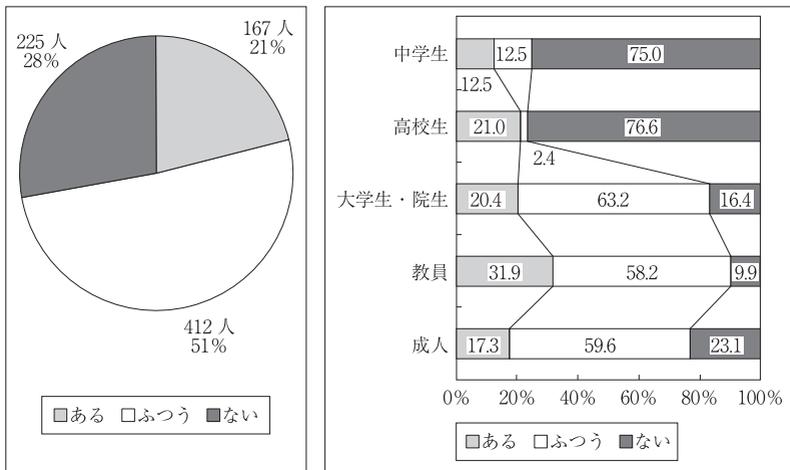
本稿「4」にて多少を問わず、朝鮮語が生活言語としての機能を果たしていることが明らかになったが、ここでは自分の朝鮮語能力をどのように自己評価しているのかを、ふたつの調査結果をふまえて探ってみる。質問のひとつは「自分の朝鮮語に自信が（ある、ふつう、ない）、もうひとつは「朝鮮半島（南北）において自分の朝鮮語は（十分通じる、半分ぐらい、20%以下）である。このような質問も、被調査者コミュニティにおいてはじめて実施されたものである。

5・1 朝鮮語能力に対する自己評価

なにを基準にした自己評価なのかも各々違いがあると考えられるが、21%が「自信ある」、51%が「ふつう」、28%が「自信ない」となった（グラフ6-1）。

中学・高校生の場合（グラフ6-2）、他の被調査者とは比べ物にならないくらい自信「ない」の%が高いが、やはり継承語（第2言語）として朝鮮語を学んだ年数と朝鮮語使用年数の少なさが反映されたものであろう。自信「ない」の%は、中

グラフ 6-1, 6-2: 「自分の朝鮮語に自信が(ある, ふつう, ない)」の結果データ



中学生 75.0%, 高校生 76.6% とあまり変わらない。しかし自信「ある」は中学生 12.5%, 高校生 21.0% となっているが、朝鮮語習得は学年があがるほど上達するので納得できる数値であろう。

「ふつう」という回答は、大学(院)生、教員、一般成人において最も回答数が多く過半数以上を占めが、回答者としては、自分は朝鮮語のネイティブ・スピーカーではないが、被調査者コミュニティにおいて他の人たちと相対的に比べ朝鮮語能力において特別な違いがないということであろう。「自信がある」と「自信ない」を比較すると学校教員と大学生・院生が「自信ある」、成人は「自信ない」の回答者が多かった。大まかにみると大学生・院生と成人の結果が似通っているといえなくもない。自信「ある」と「ない」だけを比較すると教員が他の被調査者層よりも朝鮮語レベルが高いと自己評価したことになる。

このような在日のことばに関する調査としては任榮哲(1993)がある。この任の調査研究について前田達朗(2005)は「言語状況の調査としては先駆的で、規模においてこれを超えるものは出ていない」と評価しながらも、問題点として在日という研究対象の捉え方の曖昧性、なにをもってことばが「できる」、「できない」というのが未解決であると指摘している。筆者は朴浩烈(2011)にてこれらに客観性(実証性)をあたえるため、どのくらいできるのかを第1言語である日本

語と、第2言語である朝鮮語の能力比較（バイリンガル能力データ）を詳細に提示し比較を試みることによって、前田の指摘を少しでも補える可能性を示そうとしたので本稿と合わせて参照されたい。

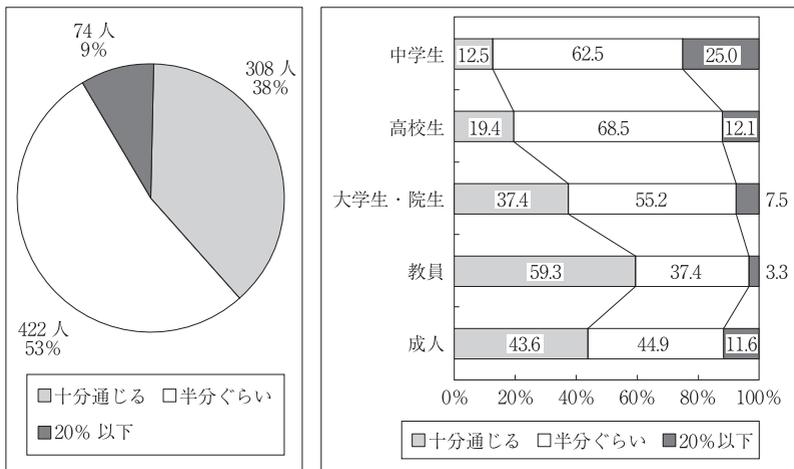
しかし、これで必ずしも十分と断定することは出来ない。そこで次の質問の結果を見ながらさらに考察を深めてみる。

5・2 朝鮮語母語話者との意思疎通に関する自己評価

朝鮮学校周辺コミュニティの場合、ほとんどが韓国を故郷（父母・祖父母が生まれ育った地＝本籍）としながらも東西冷戦時代（第2次世界大戦後から東西ドイツの統一、ソ連の崩壊まで）には韓国を訪問する数はそれほど多くなかったといえる(7)。

しかし2000年代に入りその様相は一変した。「朝鮮」から「韓国」への国籍変更の増加、2000年と2007年の南北首脳会談、2002年の日韓ワールドカップ（サッカー）共催などにより、朝鮮学校生徒とその家族による韓国旅行と親族訪問などは日常化したといわれている。また日本を主な舞台としてきたビジネスも韓国へと広がり、在日が経営する飲食店、雑貨販売業、ハングル教室、民族衣装製造販売

グラフ7-1、7-2：「朝鮮半島（南北）において自分の朝鮮語は（十分通じる、半分ぐらい、20%以下）」の結果データ



(おもに結婚式などで使用するチマチョゴリなど)も韓国との本格的な提携が始まるようになった。そして朝鮮学校周辺コミュニティの若い人たちと韓国人との結婚件数も増加傾向にある。

一方、北朝鮮と朝鮮学校周辺コミュニティの関係は以前からあったが、北朝鮮に対する日本政府の一連の経済制裁により訪問者が減少し、接点が少なくなったと考えられる。新潟と元山(北朝鮮)を行き来したマンギョンボン号の運行差し止めと、北朝鮮との貿易禁止がその要因として大きいと考えられる。しかし航空便による修学旅行、帰国した親族への訪問は続いている。朝鮮学校の高校生は修学旅行として北朝鮮を訪れるが、朝鮮大生の場合、教育実習として北朝鮮の小・中学校にて模擬授業を行なう、あるいは金日成総合大学などにて学術討論会なども行っていると聞く。したがって学生から一般成人までネイティブ話者である日本人(南・北)との朝鮮語によるコミュニケーションが比較的頻繁に行われているといえる。このような背景をおさえた上で結果を分析する必要がある。

全体(グラフ7-1)としては「半分くらい」53%>「十分通じる」38%>「20%以下」9%となったが、中学・高校生を除けば「半分くらい」49.2%>「十分通じる」42.5%>「20%以下」8.3%となり、「半分くらい」と「十分通じる」の差が少なくなっている。

「十分」をどの水準にて判断するかという主観性は致し方ない。謙遜による回答、自己顕示による回答も多少あると考えられる。中学生12.5%、高校生19.4%、大学・院生37.4%、教員59.3%、成人43.6%が「十分通じる」であるのに、前出の質問(グラフ6-1, 6-2)「自分の朝鮮語に自信が(ある, ふつう, ない)」の「ある」の回答となると全般的に謙遜気味の回答になっているという特徴を見出せる。謙遜気味の回答は「ふつう」と「半分くらい」、「ない」と「20%以下」でも見てとれる。

このような傾向は、アンケート調査が持ちえる一般的特徴でもあるが、あらゆる傾向を調べる調査においても、信頼度が高いデータを得るためには、重複を避けながらも質問を吟味し、異なった角度から迫るような工夫を施すことが実態(真実)にできる限り肉薄できうる手段になろう。

質問「自分の朝鮮語に自信が(ある, ふつう, ない)」と「朝鮮半島(南北)において自分の朝鮮語は(十分通じる, 半分くらい, 20%以下)」を重ね合わせ分析することで、視角と分析の幅が広がりを見せると考えられる。

「3・2」においてアンケート質問「在日同胞式の朝鮮語といわれることばは（だめである，直さなければならない，問題ない）と，その理由」を分析したが，在日特有の朝鮮語であっても，ネイティブ・スピーカーとの意思疎通には基本的に問題ないと被調査者たちは見ているのではないだろうか。

6. 朝鮮語の必要度調査

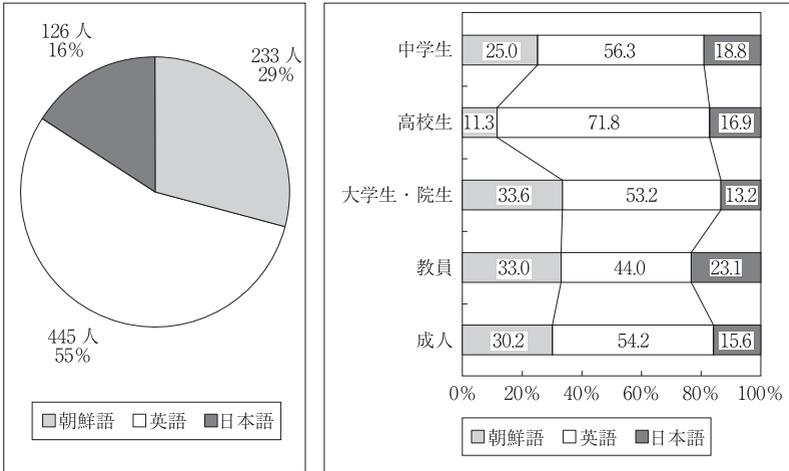
ここでは「もっと一生懸命勉強すればよかったと考えるのは（朝鮮語，英語，日本語）」、「在日朝鮮人は朝鮮語を（知るべき，知るべきだとはいえない）」、「30年後，日本に住んでいる自分にとって朝鮮語は（必要，不必要）」の3つのアンケート調査結果をお公表する。また類似的先行研究との比較分析から，被調査者における朝鮮語の必要度を考察してみる⁽⁸⁾。この質問も被調査者コミュニティにおいては，はじめての質問となる。

6・1 英語，日本語との比較調査

任榮哲（2005）は，本稿とは質問自体が違うが，「[外国語]といたら何語が思い浮かぶか」というアンケートを在日韓国人，在米韓国人，在中朝鮮族を対象に行っている。在日韓国人の結果は，①英語（96.7%），②フランス語（61.5%），中国語（36.1%），④韓国語（34.3%），⑤ドイツ語⑧（28.7%）となっている。そして「在日韓国人が「日本語」を外国語として認識している割合は10.9%でかなり低い」が，「34.3%が韓国語を外国語として認識している」と述べている。同じ在日コリアンでも，これまでの本稿の調査結果と比べると民族語に対する言語意識の傾向において大きな違いをみせている。つまり朝鮮学校周辺コミュニティにおいては韓国語（朝鮮語）が外国語であるという認識は皆無であり日本語は第1言語ではあるが居住国の言語（外国語）であるという認識である。

そこで「もっと一生懸命勉強すればよかったと考えるのは（朝鮮語，英語，日本語）」という質問を投げかけた。グラフ8-2を見ると，高校生の「英語」回答率（71.8%）が他の回答よりも高いが，大学受験が目前に迫っているという状況を映し出した結果であると考えられる。アンケートを実施した高校3年生たちとの会話の中で「受験で苦労しているから」，「通訳者を目指している」，「英語は世界共通

グラフ 8-1, 8-2:「もっと一生懸命勉強すればよかったと考えるのは(朝鮮語, 英語, 日本語)」の結果データ



語], 「活躍の舞台, 仕事が広がる」という意見が聞かれた. グラフ 8-1 によって英語 (55%), 朝鮮語 (29%), 日本語 (16%) の順番であることがわかるが, 第 1 言語である日本語, 第 2 言語 (継承語) としての朝鮮語, 第 3 言語 (第 2 外国語のようなもの) としての英語という性格が反映されているのであろう. つまり習得が難しいことばの順序としてパーセンテージが高くなっていると考えられる.

朝鮮学校の場合, 中学校に入って英語を学ぶ. 朝鮮大学校においても英語が必修外国語となっている. 日本社会における早期英語教育肯定論の影響もあって最近では朝鮮学校でも「英語」科目とは別に「英会話」を設ける, あるいはネイティブ・スピーカーによる英語教育を実施している学校があるなど英語熱は高いようである. このことはグローバル化が叫ばれる中, やはり朝鮮学校とその周辺コミュニティにおける英語重視は, 昨今の日本社会の風潮と変わりはない.

もともと朝鮮学校は, 民族性を育みながら知識と教養を身に付けることを目的とし, それらは「知・徳・体」ということばによって表現されてきた. 「知・徳・体」も「民族自主意識」の上に成り立ってこそ意味があるという教育方針である. しかし現在の在日社会では, 朝鮮半島出身の 1 世および民族学校生徒の減少 (朝鮮語理解者の減少), 日本国籍への帰化者および国際結婚が増加傾向にある. 民族性の

希薄化が進行しているという危機意識が80年代頃から形成されてきた。

このような危機意識は益々増幅されていると考えられるが、3、4世が在日社会の中核を占めるようになったこと、その中でも自己の出自とルーツ意識を大切に考えようとする3、4世が子育てをする時代になり新たな変化が生まれつつあると考えられる。その変化とは、「エスニック・リバイバル」⁽⁹⁾とも言うべき現象ではないかと筆者は分析している。そのような流れの中、朝鮮語への関心も高まりつつあるのではないだろうか。

英・朝・日の3言語のうち、もっと一生懸命勉強すればよかったと考えることばとして、朝鮮語が2位、しかも約30%回答であったということは、在日のことばに関する意識調査を継続的に行おうとする時、そして世代交代が進むさまざまなエスニック集団における継承語意識を調査する場合における比較参考基準値ともなりえよう。

6・2 在日朝鮮人にとっての朝鮮語の必要度

表2：「在日朝鮮人は朝鮮語を（知るべき、知るべきだとはいえない）」の結果データ

	知るべきだ	知るべきだとは いえない	どちらとも いえない
中学・高校生 (140人)	94.3%	4.3%	1.4%

3ヶ国語に対する考えから朝鮮語の必要度へズームアップするため、中学・高校生には「在日朝鮮人は朝鮮語を（知るべきだ、知るべきだとはいえない）」という質問を設けた。結果（表1）は圧倒的に「知るべきだ」であった。朝鮮学校生徒の言語意識が明確に現れたとなるが、他の調査と比較してみると、比較資料として質問の表現は若干違うが、内容に共通性があると認められる研究を取り上げる。比較対象は在日コリアンである。

比較資料 A：任榮哲（1993）

- ・調査期間（1988年9月～1989年4月）
- ・対象地域と被調査者の属性（任：41, 47頁を参照されたい）

- ・質問「母国語をできる能力を持つべきか」
- ・結果：「はい」50.7%、「いいえ」6.5%、「どちらともいえない」41.7%、「無回答」1.1%

比較資料 B：前田達朗（2005）

- ・調査期間（1996年10月～1997年1月）
- ・対象地域と被調査者の属性（前田：99頁を参照されたい）
- ・質問「「在日」にとって朝鮮語を学ぶことは必要か」
- ・全体結果：「必要」53.9%、「必要ではない」9.8%、「個人の選択による」34.3%、「無回答」2.0%
- ・前田は世代別に分けた結果も公表している。グラフの正確な％は読み取れないが、3世の場合「必要」43%程度、「必要でない」15%程度、「選択による」42%程度、4世は100%が「選択による」となっている（朝鮮学校被調査者の中・高生全員が3、4世であるための比較）。

任は在米韓国人にも同じ質問をしているが92%が「はい」、1.9%が「いいえ」、5.9%が「どちらともいえない」、0.2%が無回答であったとなっている。

任の調査（1988年～1989年）と筆者の調査（2006年～2008年）には約20年の時間差があるが比較すると、「母国語（＝韓国語・朝鮮語）」能力を持つべきだという回答が一番高かったのが朝鮮学校生徒、続いて在米、そして任が調査した在日となる。任は「社会生活環境、異文化に対する適応度、アイデンティティ、母国語の学習経験の有無など、いわゆる社会言語学的要因と言語意識には、密接な相関関係があるということは明確である（91～92）」と述べている。前田も民族的アイデンティティと言語獲得との相関関係を分析しているが「本人の選択による」の回答には「「言語＝民族」イデオロギーから若い世代ほど自由であるともいえる（107）」と分析している。

上にあげたデータと分析（任・前田）を筆者の調査結果と比較すると、朝鮮学校生徒のほうが朝鮮語は必要であるとの考えが強いとなろう。

アンケート質問「在日朝鮮人は朝鮮語を（知るべき、知るべきだとはいえない）だけでは中学・高校生の場合、どうしても「一般的にはそのように考えるのでは」

というように、第3者的（客観的）な視点での回答になるおそれがある。そこで「30年後、日本に住んでいる自分にとって朝鮮語は（必要、不必要）」か、という質問も合わせて回答を求めてみた。この質問によりことばを自分自身にさらに接近させ回答の主体性をより求められよう。

6・3 未来における朝鮮語必要度

表3：「30年後、日本に住んでいる自分にとって朝鮮語は（必要、不必要）」の結果データ

	必要	不必要	どちらともいえない
中学・高校生 (140人)	93.6%	6.4%	0%

「表2」と「表3」を比較するとほとんど差異がないという結果となる。朝鮮語に対する継承意識の高さが浮き彫りになったと同時に、日本における自分自身の生活に朝鮮語は欠かせないという言語意識が明確に現れたことになる。差別や偏見（チマチョゴリ切り裂き事件や昨今のヘイトスピーチなど）によって委縮するのではなく、マイノリティではあるが在日朝鮮人としての民族的アイデンティティを重んじる朝鮮学校教育とその流れの中にある言語観（朝鮮語観）によってこのような結果になっているのではないだろうか。

7. おわりに

本稿は、アンケート調査の結果を8つの「グラフ」（左右を別々と捉えると16）と2つの「表」として明示し、自由記述によって得られた被調査者たちの見解（理由）も紹介した。そして本稿のデータを先行研究との比較分析を行うことによって朝鮮学校周辺コミュニティの特徴を客観的に浮き彫りにしようと試みた。

普段使うことばに対する意識や生活における言語選択にもマジョリティとマイノリティには多少を問わず違いがあるのではないかと考えられる。その違いは言語（ことば）から何を放っているのかに集約されるのではないだろうか。マイノリティの放つ深層心理は言語化もしくは可視化されにくいものである。

本稿において、在日コリアン・オールドカマーにおけるコミュニティのひとつである朝鮮学校周辺コミュニティの場合、ことばから朝鮮半島における1つの民族と2つの国家、生活拠点であり永住の地でもある日本（在日コリアン社会含む）が複雑に絡み合いながら言語アイデンティティと言語実態が放射されていることを実証できたのではないだろうか。

現在、日本国内には200万人以上の外国人が地域社会を構成する一員として生活を営んでいる。つまりグローバル化は日本国内の足元からすでに進行中であり、その結果、多文化社会も訪れているともいえよう。そのような流れの中、さまざまな在日外国人とそのコミュニティにおける言語とアイデンティティ、言語生活などの実情を知るための研究は、マジョリティとマイノリティとの相互理解を前提とした多言語社会をめざす上で欠かせない研究であろう。

注

- (1) 1993年には在日韓国朝鮮人における特別永住者は、578,741人となっており減少傾向が著しいが、日本国籍取得者の増加によるものであると考えられる。在日コリアンにおけるオールド・カマーの中には特別永住資格ではない人も存在するのでオールド・カマーの人数は統計より若干多いとなる。ちなみに1952年から2011年までに韓国・朝鮮籍から帰化（日本国籍取得）した総数は340,193人であり、国籍を問わなければ在日コリアン系は100万人以上（日本の総人口の約1%）になるとの推計もある。また日本人との国際結婚によって生まれた子どもたちを含めるとさらに増えることになる。
- (2) 朝鮮学校に関しては金徳龍（2004）、在日朝鮮人教育の歴史に関しては小沢有作（1988）などを参照されたい。
- (3) 本稿にて提示したグラフはすべて左右のグラフを同時掲載している。右の横棒グラフは中学生16人、高校生124人、大学生・院生348人、教員91人、成人225人の回答を%で表したものであり、左の円グラフは、回答者総数804人の全体像を人数と%で表したものである。これ以降もこの方式（1-1（左）、1-2（右））にてグラフを提示する。
- (4) 朝鮮語使用の%回答であるが「以上、程度、以下、ほとんど」ということばを省略している。
- (5) シアボジは夫の父親、シオモ二は夫の母親。
- (6) 山本雅代（2000）、宮島喬（2003）を参照されたい。
- (7) 朝鮮半島（韓国と北朝鮮）では、1953年以降今日まで朝鮮戦争の休戦状態、厳しい政治的対立、民間交流の規制（遮断）など民族分断の悲劇が続いている実態か

ら冷戦が終わっていないということを押さえておきたい。

- (8) 被調査者層の現状などを考慮し中学・高校生には「もっと一生懸命勉強しなければならぬのは」という現在進行形、その他にはあえて「もっと一生懸命勉強すればよかったのは」という過去形の質問とした。
- (9) 伝統回帰、民族回帰とも考えられるが、筆者は「ルーツ（出自）重視現象」と捉えている。

参考文献

- 金徳龍 (2004) 『朝鮮学校の戦後史 1945-1972』増補改訂版 社会評論社
- 小沢有作 (1988) 『在日朝鮮人教育論——歴史編』亜紀書房
雑誌イオ (朝鮮新報社)
- イ・ヨンスク (2009) 『「ことば」という幻影』明石書店
- 任榮哲 (1993) 『在日・在米韓国人及び韓国人の言語生活の実態』くろしお出版
- 生越直樹 (2005) 「在日コリアンの言語使用意識」真田信治・生越直樹・任榮哲 [編]
(2005) 『在日コリアンの言語相』和泉書院所収
- 熊谷泰明 (1983) 「在日朝鮮人の言語生活——南北朝鮮の言語政策との関連において」
在日朝鮮人史研究 12 在日朝鮮人運動史研究会所収
- 洪祥進・中島智子 (1980) 「日本の学校に子どもを通わせている在日朝鮮人父母の教育
観に関する調査」在日朝鮮人史研究 7 所収
- 藤井幸之助 (1999) 「在日朝鮮人の言語生活と朝鮮語教育——朝鮮を知らない世代がふ
える中で——」『世界の言語問題』4, 新プロ「日本語」研究班 1+言語政策研究会
- 宮脇弘幸 (1993) 「在日朝鮮人学校子女の言語生態・民族意識に関する調査」『人文社会
科学叢書』2, 宮城女学院大学人文社会科学研究所所収
- 朴良順 (2006) 「日本語・韓国語間のバイリンガリズムとコード・スイッチング」真田
信治 (監修)・任榮哲 (編) 『韓国人による日本社会言語学』おうふう所収
- 山本雅代 (2000) 『日本のバイリンガル教育』明石書店
- 宮島喬 (2000) 『共に生きられる日本へ——外国人施策とその課題』有斐閣選書
- 前田達朗 (2005) 「「在日」の言語意識——エスニシティと言語」真田信治・生越直樹・
任榮哲 [編] (2005) 『在日コリアンの言語相』和泉書院所収
- 朴浩烈 (2011) 「文字理解に伴う言語能力と動態的特徴を示すバイリンガリズム——在
日コリアンに対するアンケート調査を踏まえて——」神田外語大学韓国語学会 [編]
『韓国語学年報』7号所収
- 任榮哲 (2005) 「在日韓国人の言語生活」真田信治・生越直樹・任榮哲 [編] (2005)
『在日コリアンの言語相』和泉書院所収

*参考文献は本文上の出現順